

I

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

道化と絵画といえ、人がまず心に想い浮かべるのは、セザンヌの静的な動きを欠いたアルルカン（アルレッキーノ）の立像又は座像であり、ついでピカソのアルルカン又はサーカスの芸人の像であろう。もう少し道化のことを心にとめている人なら、ルオーの、キリストと重なるサーカス道化を想い浮かべるかも知れない。これらのアルルカンは、どちらかというと蒼ざめた、造型的コンポジションを固定させたもので、生気を欠いているのが特徴であると言っても過言ではなからう。これは、わが国では南政善氏のピエロ像にまでつながる一つの道化の零落した姿——勿論これは文化史的な意味においてであって芸術史的な意味においては——であると言っても過言ではない。こういった絵画に定着された道化から人が得ているイメージは、ピエロ又はアルカンの、太陽の下よりも、月光の下で、妖しく錯乱する陰の世界の造型という方向に定着せざるを得ないようである。ヴェルレーヌの詩『みやびなる宴』やシェーンベルクの『月にうかれるピエロ』などが、こういった像の形成に寄与したことに疑いはない。しかし、こういった道化像は、まだ、造型性、又は詩的世界というプリズムの中で捉えられているから、貶しめられた道化というのは早断であろう。

ところが、日常生活で道化と同義語として使われたピエロという言葉はどうだろうか。このようなコンテキストでは、ピエロⅡ道化という言葉は、殆んど軽蔑的な意味を込めて使われる。道化者といえ、オッチョコチョイという意味であり、政治的にピエロといえ、それは、頼りにならないというつけ者ということになる。どうしてこういったことになったのかということを知るためには、十九世紀から二十世紀にいたる精神史の風土において何が起こったのかが顧みられなければならないのだから、本稿の限られたスペースでそれを果すことは不可能である。ただ、可視的、計量的な現実に限定して世界を語る「実証的」理性主義、コミュニケーションの儀礼の枠として、外見的「真面目さ」のみを残し、他の表現方法を捨て去った西欧近代市民社会の道德観、一人の人間を恒常的な数値としか認めない、つまり変数を拒否する人間観が支配的になった世界では、限度を知らない変身を身上とする道化は、落伍者の身分に落とされざるを得ないのは当然であったと言えるであろう。或る意味では、近代社会における真のアウト

サイダーこそ狂人と道化に外ならなかった。こういった言い方が、決してアイロニカルでも、逆説的なものでもないということは、今日、我々の身近な体験から、それ程努力しなくても理解されるようになってきた。たとえば、我々は、かつて、つまり十数年以前のように、革新政党に属しているからといっても、一人の人間がアウトサイダーであると言わないばかりか、こういった人たちが却って、頑迷なインサイダーであることを知るに至っている。一方、これまでの通念^cでは、殆んど理解しがたい現象が、社会、人、道德、風俗の全般にわたって生起してきつつあるのを目撃しているばかりでなく、そういった整理不可能な現象に強く惹^ひかれる己れを不可解なものとする視点までが定着してきつつある。文学作品でも、ここ数年、洋の東西を問わず、頼りにならない、薄バカのような、アイデンティティを剥ぎとられたタイプの主人公が我々の関心を惹きつけてきたのはよく知られているところである。これは、グループ・サウンズの出現にも見られる現象であり、併行的にドロップ・アウト、或いは、反戦運動の風俗演劇化に見られた現象でもあった。

D、人は、文化と制度の公的な自己主張、そして、そういった装置を介して、人の道を、活字又は教壇を通して一方的に押しつけようとする者の言表を額面通りに、手応えあるものとして受けとらなくなってきたと言えよう。こういった時代には、人は、慣習化しない、飼^ない馴^{ある}らされていないイメージ或いは言葉を、自らのアイデンティティと深い現実の層との断層を埋めるための橋梁^{きょうりょう}として意識してくる。

こういった世界に、埋れた意識の地層から現実の裂け目を通して、その不可解な姿で、再び現実世界を侵蝕^{しんしょく}しつつあるのが、道化である。二十世紀の精神的宇宙に、道化的行為の偉大な伝統を受け渡したのは絵画芸術であったと言っても過言ではない。しかし、にもかかわらず、今日の道化ルネッサンスに絵画芸術が特にイニシアティブをとっているわけでもないのはどうしたわけだろうか。これには、別の回答が用意されなければならないのであるが、少なくとも、絵画史の隠れた、そこから、新鮮なフォルムが立ち現われてくるような地点の探査の視角が、必ずしも絵画芸術においてではなく、他のジャンルに立ち現われているというのは興味深い現象である。

今日、様々な知的ジャンルの中で、特に道化のイメージを全面に出すことによって、知的現象をリードしつつあるのは映画であるといった過言でなからう。映画芸術の中の道化といえば、人が先ず想い浮かべるのはフェデリコ・フェリーニの作品の中の道化

であろう。『道』におけるジェルソミーナ、『カピリアの夜』における娼婦^{しょうふ}、『魂のジュリエッタ』におけるジュリエッタ等は、すべて、「聖なる白痴」という、道化の一方のイメージの伝統に基づいて息を吹き込まれた主人公であった。これらの主人公は、十九世紀の伝統ではどちらかというと、悪意の影を宿さない、日常生活の現実における一方的な被害者としてのピエロが女身に移された存在である。このイメージは、二〇年代から三〇年代の映画史では、ふつう考えられるようにチャールズ・チャップリンではなく、むしろハリー・ランドンによって代表されていた。ランドンの白く塗りつぶした幼児的な表情、いつも、短い袖、ズボンの服装は、彼の日常生活の現実への不適応を示していた。

ジュリエッタ・マシーナのジェルソミーナ又はハリー・ランドンの如き日常生活における極度の無能力。普通人に要求される能力、身分から解放されることによって、彼は効用性と社会秩序という義務系から解放される。通常この立場にあるのが狂人又は幼児であるために彼はこれらの立場を偽装する場合が多い。こうして、彼は、一つの社会の周辺に立つという特権を享受する。彼は^E

二つの世界の境界を自らの棲家^{すみか}とするヤヌス的存在である。日常生活の規準から見ると、彼のすることなすことは、ポイントがずれていて、何一つ、この世界の有効な目的にかなうことは出来ない。F

彼の、行為、言葉には、不可解であるが、それ自体に或る種の一貫性があることが感じられる。この一貫性をうまく表現する言葉が、論理が、又は体系がこの世界にはみつからないために、彼のもたらず印象は、混乱と混沌^{こんとん}のみであるように思われる。この混沌が奇妙な安堵感^{あんどかん}を与える場合、それは「笑い」を介して、人々に受けとめられる、不安感を醸し出すとき、それは「恐怖」として受けとめられる。笑いと恐怖はそれ故、道化を介して位置づけられるときに、意外に近いものである。どちらの場合も、過度に惹き起こされるときに、それらは存在の不安感を掻き立てる。道化の窮極的なねらいは、そういった地点に人を誘い出すところにある。道化が多く社会で悪魔の申し子の如く考えられ、メフィストフェレスの慣習的な描き方がそうであるように、悪魔^Gが道化の衣裳^{えいしょう}を帯びて描かれるのには、こういった根拠がある。

H、道化の行為は、日常生活の倫理や効用性からは解放されたところに成り立っているために、行為の内容が日常生活の価値体系の秩序によって正当化される必要はない。そういった意味で道化は木偶^{でく}或いは子供の如く自由に立ち振舞うことが許される。

木偶の行為が人間の、内容を抜きとった反覆であるように、子供の行為が、大人の行為の同じ意味での模倣であるように、道化の行為も普通人の行為から「内容」を抜きとった反覆、この場合はパロディーであり得る。木偶が、内容の拘束性を最低限に抑えて、動きの純粋性を追求することができるよう、子供が、大人の行為の模倣において、純粹遊戯の次元に立ち還るように、道化は、主人公の行為のパロディーにおいて、同じ行為の「かたち」だけ抜きとって、別の次元に移し替える。神楽の道化の動き、又はインディアンの儀礼で、道化が、聖なる主人公のパロディーを行なう場合に成立する状況はこういった点で、道化はメロドラマの主人公が目ざす完成点と全く逆な地点を目ざして進むのである。メロドラマの主人公が、全く日常世界を主情的に内側から見て、自分の感情で満ちそうとするのに対して、道化は、世界を、単に身振り間の力学的関係だけから見ようとする。したがってメロドラマの主人公の行為が筋書きの上に完全にのっているのに対して、道化の行為は、瞬間的なシチュエーションにすべてがかけられているために、筋書きからは出来るだけ遠く離れようという志向によって支えられている。貞操を奪われたといつて悲嘆に暮れて大仰に嘆き悲しむ女主人公。そのあとから出て来る道化は更に大仰にこの身振りを模倣し、観客を爆笑の渦に捲き込んで、抽象的な意味での貞操などというものが、私有財産制の上に成り立つだけの偽善的な秩序維持の方法の一つに過ぎないことを一瞬のうちに描き出す。こうして観客を陳腐な感傷から連れ出して、彼は演劇のたのしみは、距離を置いて「身振り」のかたちのダイナミックなかわり合いをたのしむことによって、より深い現実¹に立ち還る術を身につけることを示す。道化は、たしかに、今日の演劇的体験の中では、失われてしまった地平からの贈り物である。こういった技術こそ、ブレヒトが異化と呼んだものなのであった。道化術こそは、異化の技法の至高の表現形態であるといっても過言ではない。ブレヒトはこういった異化の方法を二〇年代ロシアのフォルマリズム、或いはメイエルホリド演劇から学んだと言われているが、彼自身の初期の最も親しい友人の一人であり師でもあった寄席の道化カール・バレンティンから学んだものでもあることに疑いはない。初期のブレヒトの作品、たとえば『パール』等に道化のテーマが顕著に押し出されていることにも、彼らの友情は明らかに反映している。つまり、ブレヒトの「距離を置く」技術は意外にも、こういう民衆的な基礎の上に打ち樹^たてられているのである。

しかし、ここで、はっきり確かめておかなければならないのは、道化の二十世紀芸術に対する寄与は、「かたち」はそれ自体の自

律性を持つという事実である。この点で、アルレッキーノを描いたセザンヌ、サーカスの曲芸師及び道化を描いたピカソ、サーカスの道化を好んで描いたロートレック、或いはドガの立場は正当化されるようである。これらの道化は、日常生活の倫理、効用性をおびておらず、「かたち」そのものにおいて、タブローに再現できるという特徴のために、内容より形へ、慣習的なパースペクティブから、フォルムの力学へ移行しつつあった時代の絵画的素材に最適の対象であったと言える。

内容を「かたち」から切り離して、これをカッコに入れることは相当に人をいらいらさせる。もし道化の基本的特徴がこの点にあるとするならば、彼の第二の特徴は、この、人をいらいらさせ混乱に落とし入れるところにあるとすることができる。日常世界において、一見白痴的に見えた道化の本意は、実は、生活世界の関節外しに向けられた努力であったことが今や明らかになる。道化は日常生活のありきたりの構文法に従うことを拒否することによって、日常生活を支配している規則が、実は相対的なものに過ぎないことを明らかにして、その相対化運動に力を貸す。政治家の多くが、同じことを上昇志向によって成し遂げることを道化は下降志向によって為しとげるのである。前者は後者を模倣できないのに対して、後者は前者の形態をとり込むことによって、前者よりも包括的な立場を獲得することができる。道化は、人及び事物を、日常生活において属している文脈から切り離すことによって、それらが本来属している、日常生活を越えた宇宙論的秩序の中でおびていた輝きをとり戻すことを助ける。そこで、道化は、彼が、肉体的には暴力的ではないとしても、存在論的には攻撃的であるという一見逆説的な能力を獲得するのである。

(山口昌男 『知の祝祭 文化における中心と周縁』 河出書房新社 一九八八年より引用 問題作成の都合上一部変更)

問一 傍線部A「日常生活で道化と同義語として使われたピエロという言葉」が意味するものとして、最も適切なものを次の①～

⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 1。

- ① 泣いている人を勇気づける存在
- ② サーカスで曲芸を行う存在
- ③ ぼんやりとしていてうっかりしている存在
- ④ 大道芸人として生計を立てている存在
- ⑤ 悪魔の手先として混乱をもたらす存在

問二 傍線部B「軽蔑」の対義語として、適切なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 2。

- ① 惻隠
- ② 畏敬
- ③ 景仰
- ④ 尊崇
- ⑤ 欽慕

問三 傍線部C「これまでの通念」を説明する記述として、適切でないものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 3。

- ① 多数派が正しいとされる社会から逸脱した存在が魅力的だとする考え方
- ② 計量的な現実限定して社会を語る考え方
- ③ 多様性を認めることが困難であるという考え方
- ④ 支配者側の言葉を人々が疑いなく受け入れるべきだという考え方
- ⑤ 西欧近代市民社会の道徳観をふまえた考え方

問四 空欄部 D、F、Hに入る語句の組合せとして、最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番

号は 4。

- ① D…つまり F…しかし H…いずれにしても
- ② D…しかし F…つまり H…ただし
- ③ D…いずれにしても F…つまり H…だが
- ④ D…いずれにしても F…しかし H…ところが
- ⑤ D…つまり F…しかし H…だが

問五 傍線部E「彼は二つの世界の境界を自らの棲家とするヤヌス的存在である」とあるが、この説明として、最も適切なものを

次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は 5。

- ① 彼は、能動的に大道芸を演じる道化でもあり、それを受動的に眺めている観客でもあるという意味
- ② 彼は、絵画的表現の静的な世界観と演劇的表現の動的な世界観を使い分けているという意味
- ③ 彼は、日常生活の倫理や社会秩序から解放された世界とありきたりな慣習に従う日常世界との間に立っているという意味
- ④ 彼は、ジュリエッタ・マシーナが演じる愚かな女性の内面性とハリー・ランドンが演じるあどけない男性の無垢さを併せ持っているという意味
- ⑤ 彼は、人間を恒常的な数値としか認めない世界と、変数を拒否する人間観が支配的になった世界の境界を棲家としているという意味

問六 傍線部G「悪魔が道化の衣裳を帯びて描かれる」と筆者が考える理由は何か。空欄部を次の形式に従って三十字以内で記しなさい。ただし、「笑い」、「恐怖」、「存在の不安感」という言葉を必ず用いること。 解答は 国語解答用紙。

道化のもたらす印象が 三十字以内。

問七 傍線部Ⅰ「今日の演劇的体験の中では、失われてしまった地平からの贈り物」が意味するものとして、最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 6。

- ① 筋書きとは異なる大仰な身振り手振りで主人公を模倣することで観客を爆笑の渦に巻き込むこと。
- ② 筋書きから出来るだけ距離を置くことを目的として演じること。
- ③ 筋書きから外れて役者と観客のダイナミックなかかわり合いの中で演劇の相互作用をたのしみ、現実逃避すること。
- ④ 筋書きから遠く離れることで、日常を支配している規則を批判的に捉える視点を持つこと。
- ⑤ 筋書きとは違うアドリブによって主人公の役柄が持つ主情的な内面を深く表現すること。

問八 傍線部Ⅰ「内容を『かたち』から切り離して、これをカッコに入れることは相当に人をいらいらさせる」とあるが、その理由として、最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 7。

- ① 道化特有の白塗りの顔が人を馬鹿にしたような印象を与えるから。
- ② 道化が演劇だけでなく、絵画の世界でも仕事をしているから。
- ③ 道化がメロドラマの主人公を陥れることで、その作品のストーリーを破綻させるから。
- ④ 道化の自由な立ち振る舞いが物事の別の側面を暴くから。
- ⑤ 道化が悲嘆に暮れている女主人公をだますことで、観客の気持ちを暗いものにさせるから。

問九 次の1～5の傍線部にあてはまる漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 8 く 12。

1 人口の減少はシンコクな問題である。 8

- ① 告 ② 黒 ③ 刻 ④ 国 ⑤ 酷

2 洋服を作るために生地をサイダンした。 9

- ① 裁 ② 祭 ③ 最 ④ 際 ⑤ 再

3 この地域は昔からヨウサン業が盛んである。 10

- ① 酸 ② 山 ③ 蚕 ④ 産 ⑤ 散

4 友人の結婚式にショウタイされた。 11

- ① 招 ② 紹 ③ 将 ④ 承 ⑤ 勝

5 最近は動画ヘンシュウに興味を持っている。 12

- ① 偏 ② 返 ③ 片 ④ 編 ⑤ 変

Ⅱ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

何よりもまず消費主体として自己確立することを、今の子どもたちはほとんど制度的に強いられています。原因はいくつもあげることができます。どなたにも納得のゆく原因は超少子化です。

超少子化の結果、夫婦に子ども一人という場合、その子どもには「シックス・ポケット」と言つて、両親と両親の祖父母たちの六つのポケットからぐくぐくと潤沢におこづかいが供給されます。うっかりすると、三歳、四歳で、もう紙幣を携えてものを買いに行った経験を持っている子どもがいる。

僕たちの世代で、生まれてはじめての社会的活動が労働ではなくて消費であった、家事労働の手伝いを経験するより先に、まずお金を使ったことがあるという子どもはほとんどいなかっただろうと思います。A、今の子どもたちは、もしかすると、その過半が生まれてはじめての社会経験が、買い物だったということになっているのではないのでしょうか。

この最初の経験の違いは、かなり決定的なもののように僕には思われます。

子どもたちが生まれてはじめての買い物をしたときに、どんな印象を受けたでしょうか。それほどむずかしい想像ではありません。

それは「^Bお金には色がついていない」ということです。

コンビニのレジカウンターにお金を出せば、「いらっしやいませ、こんにちは」という無機的な挨拶とともに、買い手が四歳の子どもであろうと、二十歳の青年であろうと、八十歳の老人であろうと、原理的には同一の商品やサービスと交換されます。当たり前じゃないかと思うかもしれませんが、四歳の子どもにとっては、これは驚嘆すべき経験だったはずです。正味の人間として社会関係の場に出現した場合、四歳の子どもを交渉相手として対等に遇してくれる大人はまずいません。けれども、お金を使う人

間として立ち現れる場合には、その人の年齢や識見や社会的能力などの属人的要素は基本的に誰もカウントしない。そこで使われるお金の多寡^{たか}だけが問題で、誰がそれを使うかということには誰も顧慮しない。それが「お金の透明性」という特権的性格です。

C、社会的能力がほとんどゼロである子どもが、潤沢なおこづかいを手にして消費主体として市場に登場したとき、彼らが最初に感じたのは法外な全能感^{たか}だったはずです。子どもでも、お金さえあれば大人と同じサービスを受けることができる。このような全能感^{たか}は僕たちの時代の子どもがおそらくまったく経験したことのない質のものだと思います。

消費することから社会的活動をスタートさせた子どもはその人生のごく初期に「金の全能性」の経験を持つてしまう。そのスタートラインにおける刷り込みの重みは想像される以上に大きいと僕は思います。それは単なる拝金主義^D的傾向が刻印されてしまうということとは違います。そうではなくて、消費主体として立ち現れる限り、買う主体の属人的性質^Dについては誰からも問われないということです。

問題は金の多寡ではないのです。「買い手」という立場を先取することなのです。

「ぼくは買い手である」と名乗りさえすれば、どんな子どもでもマーケットに一人前のプレイヤーとして参入することが許される。その経験のもとらす痺^{しび}れるような快感が重要なのです。

幼い子どもがこの快感を一度知ってしまったら、どんなことになるのかは想像に難くありません。子どもたちはそれからあと、どのような場面でも、まず「買い手」として名乗りを上げること、何よりもまず対面的状況において自らを消費主体として位置づける方法を探すようになるでしょう。当然、学校でも子どもたちは、「教育サービスの買い手」というポジションを無意識のうちに先取しようとします。彼らはまるでオークションに参加した金満家たちのように、ふところ手をして、教壇の教師をながめます。

「で、キミは何を売る気なのかね？ 気に入ったら買わないでもないよ」

^Eそれを教室の用語に言い換えると、「ひらがなを習うことに、どんな意味があるんですか？」という言葉になるわけです。

等価交換的な取引のいちばん大きな特徴は、買い手はあたかも自分が買う商品の価値を熟知しているかのようにふるまう、ということです。

当たり前のことですが、人間はその価値を知らない商品は買いません。僕たちが商品を買う場合、いくつか類似商品を見比べて、スペックを点検して性能と価格の関係について比較考量し、その商品が何を意味するか、ということを知った上でしかお金を出さない。そうですね。カタログ誌を見ればわかる通り、十分な商品情報を持って、適切な商品を選択できるものが賢い消費主体とされる。

まず消費主体として人生をスタートするというのはそういうことです。

消費主体は、自分の前に差し出されたものを何よりもまず「商品」としてとらえる。そして、それが約束するサービスや機能が支払う代価に対して適切かどうかを判断し、取引として適切であると思えば金を出して商品を手に入れる。

消費主体にとって、「自分にその用途や有用性が理解できない商品」というのは存在しないのです。そのようなものはそもそも商品としては認識されない。ですから、先ほどの小学校に入ったときに、先生に「ひらがなを習うと、何の役に立つんですか？」と訊く子どもは消費主体としてごく自然な質問を発しているわけです。「この商品は何の役に立つのか？」と訊くのは消費者の権利であり、義務ですから。

そして、この若い消費主体は「価値や有用性」が理解できない商品には当然「買う価値がない」と判断します。

そして、もう一つ忘れてはならないことは、「この商品は何の役に立つの？」というのは、修辭的な質問にならざるを得ないという事です。

F、商取引の場では、買い手は商品の有用性（あるいは無用性）について熟知しているかのようにふるまい、「その商品には興味がない」という無関心を誇示することで取引を有利に進めることができるのと知っているからです。

「そんなもの要らないよ。だって、それが何の役に立つのか（というよりむしろ何の役にも立たないこと）を、ぼくは知っているから」というのが等価交換の取引の場で最大の利益を上げる交渉術であることを若い消費主体はすでにしっかり習得しています。ですから、「ぼく、それ要らない。だって、何の役に立つのかわからないから」というのは当の子どもにとってはきわめてロジカルな対応なのです。

この問いがある種の全能感を子どもにもたらすと僕は先に言いましたけれど、教師が差し出す教育的サービスを「そんなもの、要らない」と拒絶することは、これまで人類が営々として築いてきた知的構築物を一蹴するに等しい行為ですから全能感があつて当然です。

教師は驚愕して、言葉を失い、そのあとは子どもの機嫌を窺^{うかが}いながら、なんとか「勉強してもらおう」と姑息な利益誘導を試みる。これはバザールで出来の悪い商品売りつけようとして、顧客に「そんなもの要らないよ」とにべもなくあしらわれた商人が足元に取りすがつて「いくらでもお安くしますから」と懇願するように子どもの目には見えているのでしよう。

そして、さらに危機的なのは、子どもの目から見ても、学校が提供する「教育サービス」のうち、その意味や有用性が理解できる商品がほとんどないということです。学校教育の場で子どもたちに示されるものかなりの部分は、子どもたちにはその意味や有用性がまだよくわからないものです。当たり前ですけれど、それらのものが何の役に立つのかをまだ知らず、自分の手持ちの度量衡では、それらがどんな価値を持つのか計量できないという事実こそ、彼らが学校に行かなければならない当の理由だからです。^G教育の逆説は、教育から受益する人間は、自分がどのような利益を得ているのかを、教育がある程度進行するまで、場合によっては教育過程が終了するまで、言うことができないということにあります。

しかし、消費主体として学校に登場する子どもたちは、そもそもそのような逆説が学校を成り立たせていることを知りません。昔の子どもたち、つまり、労働主体として出発した子どもたちにとって、学校における「勉強」と、家事「労働」は（いずれも英語で言えば work ということになりませんが）同一のものとして観念されていました。一生懸命「ワーク」をすれば、家族や地域の人々から「有用な社会的存在として承認される」という直接の報酬が約束されている。ですから、「ワークをすることは何の役に立つのか？」というような問いは子ども側の側からは出てきません。家事労働をしている子どもは、自分がしている労働そのものがどんな意義や有用性を持っているのかをまず知りたいとは言いません。それはただ自分がしなければ、母や父が「やらなければならぬこと」であつて、それを代行すると、母や父の負担が軽減するものにすぎません。意味なんかどうだっていいのです。「やると、

父母の負担が軽減される」ことがわかっているから、してただけです。承認の感覚を求めて、手探りで労働主体としての自己形成のプロセスを進んだわけです。

それに対して、消費主体として出発した子どもたちは目の前に差し出されたものをつねに「商品」として見ます。そして、それを「値切ろう」とする。最小の貨幣で最大の商品を手に入れようとする。ふつうの商店で売っているものなら、貨幣をもってその代価に充てます。では、学校では何を代価に充てるのでしょうか？

学校では生徒たちは教師に教育サービスの対価として貨幣を払うことができません。でも、なんらかのかたちで「貨幣」を差し出さない限り、「買い手」として等価交換の場に立つことはできない。では、彼らは何を貨幣に代用するのでしょうか？ これについては先ほど少しだけ触れました。子どもが学校で札びらを切れない以上、教室で使える貨幣は一つしかありません。

それは「不快」です。

五十分間の授業を黙って耐えて聴くという作業は子どもたちにとっては「苦役」です。彼らはその苦役がもたらす「不快」を「貨幣」に読み換えて、教師が提供する教育サービスと等価交換しようとする。

学校において、子どもたちが交換の場に差し出すことのできる貨幣はそれしかないからです。彼らは学校に不快に耐えるためにやってくる。教育サービスは彼らの不快と引き換えに提供されるものとして観念されている。

ですから、教室は不快と教育サービスの等価交換の場となるわけです。

子どもたちは、当然ここで手馴れた「値切り交渉」を行うことになります。自分の「不快という貨幣」を最高の交換レートで「教育商品」と交換しようとする。

例えば、五十分間授業を聴くという不快の対価として、そこで差し出される教育サービスが質・量ともに「見合わない」と判断すれば、「値切り」を行うことになります。仮に、その授業の価値が「十分間の集中」と等価であると判断されると、五十分の授業のうち十分程度だけは教師に対して視線を向け、授業内容をノートに書く。そして、残りの四十分間分の「不快」はこの教育サービスに対する対価としては「支払うべきではない」ものですから、その時間は、隣の席の生徒と私語をしたり、ゲームで遊んだり、

マンガを読んだり、立ち歩いたり、あるいは居眠りをしたり、消費者である子どもにとって「不快でない」と見なされる行為に充当される。

「充当される」というよりむしろ「充当しなければならない」という方が正確でしょう。

せつかく十円に値切って買うことにした商品に対して二十円を差し出すことは許されません。それは商取引のルールに悖るからです。ですから、いったん「この授業は十分程度の集中の価値しかない」と判断したあとは、残り四十分を「授業を聴かない」ということに全力を傾注しなければならない。私語するのは、「したいからしている」というより、「しなければならぬからしている」のです。諏訪さんが挙げていた、私語をしているときに教師に注意されて、憤然と「聴いてるよ！」と答えた生徒はたぶんほんとうに怒っているのです。決められた時間以上授業を聴かないように、必死の努力をしているのに、どうしてそれを単なる怠惰や不注意のようにとらえるのか。

「授業を聴く気がないなら学校に来るな」と教師が言ったら、その私語している生徒は激怒するでしょう。生徒たちからしてみたら、それはバザールで商品を眺めながらどうやって値切ろうかと考えていたら、「定価で買う気がないならマーケットには来るな」と怒鳴りつけられた買い物客と同じ気分のはずだからです。買値は売り手が一方的に決めるものじゃない。そっちが高値をつけるから、こちらは値切るんだ。シビアな交渉を通じて、適正な価格で等価交換をしようとしている賢い消費者のこの努力をどうして認めないのだ。子どもたちはたぶんそう思っているのでしょう。

(内田樹 『下流志向』 講談社 二〇〇九年より引用 問題作成の都合上一部変更)

問一 空欄部 A、C、F、に当てはまる語句の組み合わせとして、最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 13。

- | | | | |
|---|-------------|-------------|------------|
| ① | A .. 反対に | C .. それに対して | F .. というのは |
| ② | A .. それに対して | C .. ですから | F .. したがって |
| ③ | A .. 同様に | C .. それゆえに | F .. したがって |
| ④ | A .. つまり | C .. それに対して | F .. したがって |
| ⑤ | A .. 反対に | C .. ですから | F .. というのは |

問二 傍線部 B 「お金には色がついていない」の説明としてあてはまらないものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 14。

- ① 買う主体がどのような人間かということについては基本的に問われないということ。
- ② 使われるお金の多寡だけが問題で、誰がそれを使うかということは顧慮されないということ。
- ③ 消費することから社会的活動をスタートさせることによって全能感を得るということ。
- ④ どんな子どもであっても、消費主体として市場に登場する以上、一人前のプレイヤーとして許されるということ。
- ⑤ 買い手が何歳であろうと、お金を差し出せば同一の商品やサービスと交換できるということ。

問三 傍線部D「拝金主義」の意味として最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は 15。

- ① 金銭を最上のものとしてとらえる傾向
- ② 「買い手」という立場にこだわる傾向
- ③ 金銭のやり取りを通じて大人と同じサービスを受けることを求める傾向
- ④ 自らを消費主体として位置づけようとする傾向
- ⑤ 金銭に対してこだわりをもたない傾向

問四 傍線部E「等価交換的な取引」の特徴として不適切なものを次の①～⑤の中から二つ選びなさい。

解答番号は 16。

- ① 対面的状況において自らを消費主体として位置付ける方法を探す。
- ② 自分にとっての用途や有用性を十分に理解した上で、それに見合う代価を比較考量する。
- ③ 支払う代価に対して提供されるサービスが見合わないと判断されれば購入しない。
- ④ 価値や有用性が理解できないものに対して無関心を誇示することによって取引を有利に進める。
- ⑤ 同じ代価で購入することのできる様々な類似商品を見比べて、最もメリットの大きい商品を選択する。

問五 傍線部 G 「教育の逆説」の内容を、次の形式に従って四十字以内で記しなさい。ただし、「教育サービス」「有用性」の二語を必ず用いること。解答は **国語解答用紙**。

四十字以内

ということ。

問六 傍線部 H 「彼らは学校に不快に耐えるためにやってくる」が意味するものとして、最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は **17**。

- ① 学校で等価交換の場に立つために必要となる対価を獲得しようとするということ。
- ② 学校から受益するサービスからどのような利益を得ているのかを理解することができていないということ。
- ③ 学校では五十分間の授業を黙って耐えて聴くという苦役に取り組まなければならないということ。
- ④ 値切り交渉を通じて「不快という貨幣」を最高の交換レートで「教育商品」と交換しようとするということ。
- ⑤ 学校で提供される教育サービスに対して代価を支払うという不快を被っているということ。

問七 傍線部Ⅰ「賢い消費者」の例としてあてはまらないものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は 18。

- ① あるサービスの価値や有用性を十分に理解した上で、代価に見合う選択肢を吟味する。
- ② 学校で提供される教育サービスについても、値切り交渉を通じて定価で等価交換をしようとする。
- ③ 等価交換を通じて決められた時間以上授業を聴かないように必死の努力をする。
- ④ 自分の支払った不快の対価に見合う分だけ授業を聴き、それ以外の時間は居眠りをするなどの不快でない行為を行う。
- ⑤ 目の前に差し出されたものをつねに商品としてとらえ、値切ろうとする。

問八 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は 19。

- ① 学校では、教育的サービスに対する対価として、子どもたちは金銭のほかに不快を貨幣として支払っている。
- ② 労働主体として出発した昔の子どもたちは、自分の労働の意味や有用性を理解していた。
- ③ 子どもたちは、教育的サービスを価値が低いものと判断した場合、貨幣としての不快の支払いをより少なくしようとする。
- ④ 「買い手」という立場を先取することによってこそ、値切り交渉を有利に進めることができる。
- ⑤ 学校が提供する教育的サービスの意味や有用性を子どもに理解させることが重要である。

問九 次の1～5の傍線部にあてはまる漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 20 ～ 24

1 毎年コウ|レイのお祭りが中止になった。 20

- ① 恒
- ② 功
- ③ 公
- ④ 興
- ⑤ 好

2 昨年度はテイクアウトの注文がサツトウ|した。 21

- ① 倒
- ② 当
- ③ 膳
- ④ 到
- ⑤ 踏

3 少数意見をハイ|セキしない。 22

- ① 敗
- ② 排
- ③ 廃
- ④ 拝
- ⑤ 背

4 身体と身体がコウ|サクする。 23

- ① 策
- ② 錯
- ③ 索
- ④ 作
- ⑤ 柵

5 計画が白紙にカン|ゲンされた。 24

- ① 還
- ② 寛
- ③ 環
- ④ 感
- ⑤ 換

	解答番号	解答欄					
I	1	①	②	③	④	⑤	5点
	2	①	②	③	④	⑤	5点
	3	①	②	③	④	⑤	5点
	4	①	②	③	④	⑤	5点
	5	①	②	③	④	⑤	5点
	6	①	②	③	④	⑤	5点
	7	①	②	③	④	⑤	5点
	8	①	②	③	④	⑤	2点
	9	①	②	③	④	⑤	2点
	10	①	②	③	④	⑤	2点
	11	①	②	③	④	⑤	2点
	12	①	②	③	④	⑤	2点
II	13	①	②	③	④	⑤	5点
	14	①	②	③	④	⑤	5点
	15	①	②	③	④	⑤	5点
	16	①	②	③	④	⑤	5点
	17	①	②	③	④	⑤	5点
	18	①	②	③	④	⑤	5点
	19	①	②	③	④	⑤	5点
	20	①	②	③	④	⑤	2点
	21	①	②	③	④	⑤	2点
	22	①	②	③	④	⑤	2点
	23	①	②	③	④	⑤	2点
	24	①	②	③	④	⑤	2点

I問六

道化のもたらす印象が「笑いであっても、恐怖であっても、存在の不安感を掻き立てるため」(三十字)。

「笑いや恐怖を過度に惹き起こして存在の不安感を掻き立てるから」(二十九字)。

「笑いや恐怖を問わず存在の不安感を与えるから」(二十一字)。

II問五

「提供される教育サービスの有用性を理解できないからこそ、学校に行かなければならない」(四十字)ということ。

「学校へ通う理由は、提供される教育サービスの有用性を子どもが理解できない点にある」(三十九字)ということ。